

大阪市立南港桜小学校 令和元年度 校長経営戦略支援予算【基本配付・加算配付】
実施報告書
(補足説明資料)

【加算配付】

本校では、「小学校経年調査における標準化得点を、同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より向上させる」ことを年度目標とし、年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「対象児童の単元テストの正答率を、取組実施前後比較で20%向上させる」ことを設定した。

上記を達成するために、以下の1つの取組を行った。

1. 取組内容（1）について

1－1. 取組を実施する必要性

本校では、平成30年度の全国学力・学習状況調査では、国語AB・算数ABとも大阪市平均を4～8ポイント下回っている。

特に「自分の考えを持って文に書くことや自分で解釈して判断すること、さらに自分の考えを人に伝えること」が苦手な児童が多い。

今後、グローバル化の進展など社会の加速度的な変化が増し、将来の予測が難しい中において、自分自身の答えを考える力や自分の意思で結論を導き出す力、それを表現する力が求められる。また、次期学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善をさらに充実させ、子どもたちがこれからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることを目指していく必要がある。家庭での学習習慣が定着しておらず、また、友達と話し合う活動や課題に対して主体的に取り組んだという意識の低い児童が多い。

上記の課題を解決するために、教育振興基本計画における「施策5 子ども一人ひとりの状況に応じた学力向上への取組」の一環として、「授業を「教える」から「学ぶ（促す）」に変革していくために、「子どもが学ぶ・子ども同士が学び合う」の授業に取り組む。そのために、「課題の探求」や「話し合い活動の多様化」など、子どもから発信したり、共有したりする場の工夫をし、「一人も見捨てない」を共通認識して授業づくりを行うことを実施した。

1－2. 取組を実施することにより期待できる効果

これまでの「一斉授業」からの脱却により、教員が「教える」から「教えない」授業改革を生む。それによって、子どもの自ら学ぶ意欲を最大限引き出すことができ、「自分の考えをもって文に書くことや自分で解釈して判断すること、さらに自分の考えを人に伝えること」を克服できる児童が増える。加速度的な変化が増し、将来の予測が難しい中において、自分自身の答えを考える力や自分の意思で結論を導き出す力、それを表現する力を身につけた「生きる力」を創造できる児童の育成につながる。

1－3. 具体的な実施内容

具体的な実施内容としては、下記のとおりである。

学び合いの授業研究

具体的には東京大学から小国教授を招聘し、学び合いの大切にすべき点を講義いただいたり、日頃の素朴な疑問や悩みに答えていただいたりして、教員の力量を高めた。

1－4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

- ・取組に対する達成状況：B
- ・評価理由：

学び合いにおいては、学び合いの視点に立った授業研究をしたことにより、しんどい子どもに寄り添うことの大切さや、学級づくりの基本に戻る考え方の見直しなど、教員としての最も大事なことを再認識できたという成果をあげることができた。

以上の成果から、B評価とした。

2. 総論

2－1. 年度目標の達成状況、総評

本校では、上記の取組を実施することにより、「小学校経年調査における標準化得点を、同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より向上させる」という年度目標に対して、「4年（98.3→102.7）5年（100.9→99.7）6年（102.9→101.5）と4年のみ前年度より向上することができた。また、年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「対象児童の単元テストの正答率を、取組実施前後比較で20％向上させる」ことを設定し、これに対して、取組実施前後比較で15％向上できたが目標は達成できなかった。

以上の結果から、年度目標に対する達成状況を「C」評価とした。

これはこれまでの学び合いの授業改善の成果が見えてくるのに時間のかかることや継続した取組の必要性があることを物語っている。今後も「誰一人見捨てない」というすべての子どもに寄り添える学級集団づくりを核としていくことに粘り強く取組んでいきたい。

2－2. 学校協議会における意見

特に意見はありません。